

大久野島毒ガス資料館から平和を考える

戦争の悲惨さと平和の尊さと人権問題の大切さを学習する施設として、大久野島毒ガス資料館があります。日中戦争から第2次世界大戦中の、中国東北部での旧日本陸軍731部隊のことは以前から聞いていましたが、今春ここを訪れる機会があり、このような身近なところで人間の尊厳を無視した毒ガス製造がされていたことを知り、がくぜんとしました。

大久野島：

大久野島には、広島県竹原市の忠海港から船で12分ほどで着きます。1963（昭和38）年には国民休暇村に指定され保養地となりましたが、当時、そのことが話題になりました。それは、この島がかつて毒ガスの島で有名だったからです。

毒ガス：

第1次世界大戦（1914（大正3）年～1918（大正6）年）では、初めて毒ガスがドイツ軍によって使用され、ドイツに対抗してイギリス軍、フランス軍も使い、化学兵器による戦果の大きさが注目されました。

日本では1929（昭和4）年に、東京第2陸軍造兵廠忠海製造

所が、日本陸軍毒ガス工場として大久野島に建てられました。

ここではイペリット（びらん性毒剤）を中心にして生産が進められました。びらん性毒剤は、揮発性が低くいったん土壌、草木、屋根などに付着すると、強力な毒性を發揮しながら、ゆっくりと蒸発していきます。毒性が皮膚に付着すると、2～3時間後に強度の疼痛を覚え水泡が発生し、強力な浸透力により呼吸器を通して、身体全体に大きな障害を引き起こしました。

毒ガス被害：

毒ガスによる死傷者の悲惨さは、第1次世界大戦で負傷者100万人、死者7万3000人という数字からも推し量れるように、国際的に大きな問題となりました。

した。

1925（大正14）年に、化学兵器と細菌兵器の使用を禁止したジュネーブ議定書（窒素性ガス、毒性ガスまたはこれに類するガスおよび細菌学的手段の戦争における使用の禁止に関する議定書）が締結されました。

大久野島では、1929（昭和4）年から1944（昭和19）年まで、ジュネーブ議定書での使用禁止を無視して毒ガスが製造されていきました。戦争中は大久野島が地図上から消され、極秘に生産が続けられ、一般の国民にはその事実が知られていませんでした。

ここで製造された毒ガスは、中国での戦争を中心に多くの人々に大きな被害を与えました。さらに戦争終結後に、中国で遺棄された毒ガスによる被害者が、今でも後遺症に苦しんでおられます。また大久野島で毒ガス製造に従事した人たちも被害が続出しました。

思い：

大久野島毒ガス資料館でお話を聞いたり、製造や戦後の毒ガス処

理に携わった方々で亡くなった人たちに慰霊する毒ガス障害者慰霊碑を訪ねました。島内には毒ガス貯蔵庫跡、発電所跡、南部砲台跡など、南端にある灯台から北部の点火試験場跡まで、26カ所におよぶ遺跡があります。

戦争は最大の人権侵害といわれていますが、大久野島毒ガス資料館や遺跡を訪ね、戦争の悲惨さに身震いする思いでした。

今回の研修を通して、あらためて日本の戦後処理問題のひとつを考える機会となりました。



▲毒ガスの恐ろしさを今に伝える
大久野島毒ガス資料館